エフェソ 3:14-21「わたしたちのアイデンティティー」

「こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかり立つ者としてくださるように。また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊さのすべてにあずかり、それによって満たされるように。わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのできるお方に、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン」

わたしとは、いったい何か。わたしとは何であるか。これが、アイデンティティーの問いであります。日本語では、アイデンティティーは、自己同一性というふうに訳されてもしております。自分は何者なのか、ということ。

自分がいったい何者であるか。それが、わからなくなる。そういう時がございます。不安と恐れと失望の時です。アイデンティティーの危機、というふうに申します。

自分が大切にしていたものが、壊れてしまう。自分が信頼していた人が、見向きもしてくれなくなる。自分が心から愛していた人が、死んでしまう。自分の居場所となっていたところが、なくなってしまう。自分のついの住処と思っていたところから、出ていかなければならなくなる。自分がいままで出来ていたことが、病気のため、年をとったために、出来なくなる。いままで見えていたものが、見えなくなる。聞こえていたのが、聞こえなくなる。考えられたことが、考えられなくなる。祈ることができたのに、祈れなくなる。

心が折れて、消えてしまいそうになる。自分はいったい、何者なのだろう。自

分はいままで、何をして来たのだろう。自分はこれから、どうなってしまうんだろう。アイデンティティーの危機であります。

そのようなとき、わたしたちは、あせって、もがき、苦しみます。しかし、むしろ、さらに沈んで行ってしまうのです。

ですから、わたしたちは、静まって、上から来るところの声に、耳を傾けなければなりません。いったい神は、わたしたちを、どのような者として見ておられるのか。いったい神は、わたしたちを、どのような者にしようとしておられるのか。

必ず実現して行くもの。それは、人間の計画ではなく、神の「おこころ」です。神は、わたしたちを御覧になります。神は「おまえはこういう者である」とおっしゃってくださいます。「おまえはこういう者である」という、この中に、神の「おこころ」があります。それは、わたしたちの勝手な願望や、はかない空想や、夢ではありません。神がその心のうちに深く決意されたこと。それが神の「おこころ」です。神はご自分が心にお決めになったことを、必ず実現なさいます。なぜなら、神は、神であるからです。

わたしは何者なのか。わたしたちは、何者なのか。この問いに対して、上から、神の語りかけは、わたしたちにどのように告げているでしょうか。

エフェソの信徒への手紙第3章15節をお読みいたしましょう。

「御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています」

わたしたちは何者か。わたしたちは、神の家族であります。神の子どもとして、神の愛のうちに、互いに結ばれて生きる、家族であります。ここが、わたしたちの居場所です。ここが、わたしたちの属するところです。ここが、わたしたちの生きる場所です。わたしたちは、神の家族として生きる者です。しかもこの家族は、人間の願望によって始められたものではありません。御父が、神の「おこころ」によって、始めたもうたものです。ヨハネによる福音書第1章12

節から 13 節をお読みしたします。ここで言われている「言」（ことば）とは、主イエスキリストであります。ですから、言をキリストと置き換えてお読みいたします。

「キリストは、ご自分を受け入れた人、キリストの名を信じる人々には、神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである」

今日わたしたちは、ここに、神の家族として、集まっています。ここは、父なる神が、御子イエスキリストによって生んで下さった、神の子どもたちの集まりです。ここに、わたしたちは属しています。これが、わたしたちです。

わたしたちは何者か。この問いかけに対して、上から、神からの語りかけは、さらにどのように告げているでしょうか。

エフェソの信徒への手紙第 3 章 16 節から 17 節をお読みいたします。

「どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように」

わたしたちの「外なる人」は、日々衰えて行きます。自分がいままで出来ていたことが、病気のため、年をとったために、出来なくなる。いままで見えていたものが、見えなくなる。聞こえていたのが、聞こえなくなる。考えられたことが、考えられなくなる。祈ることができたのに、祈れなくなる。

もし、わたしたちという存在が、ただ「外なる人」だけで出来ているのであれば、わたしたちは、小さくなり、ついに、消えて、なくなってしまうでありましょう。

しかし、上からの声、神が語りかけたもう声は、こうわたしたちに告げるのです。「御父は、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもって、あなたがた

の内なる人を強めてくださる」

たとい、わたしたちの「外なる人」は衰えても、わたしたちの「内なる人」は、日々強められるのです。「内なる人」は日々強められます。しかも、わたしたちが「内なる人」を強くするのではありません。父なる神が、わたしたちの「内なる人」を、強くしてくださるのです。わたしたちが、わたしたちの考えや知恵によって「内なる人」を強くするのではありません。父なる神が、永遠の栄光に従い、神の聖霊により、その大いなる力をもって、わたしたちの「内なる人」を強くしてくださるのです。このことについて、パウロはコリントの信徒への手紙二第 4 章 16 節から 17 節で、このように述べています。お読みいたします。

「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほどの重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます」

これが、わたしたちです。わたしたちは何者であるのか。確かに、わたしたちの「外なる人」は衰えて行くでしょう。そのために、わたしたちは、さまざまな不便、痛み、不愉快、不安、いらだち、失望、そして、怒りを味あわなければならないでしょう。しかし、それだけが、わたしたちではありません。わたしたちは「内なる人」の命によって生きる者です。この命は、日々新たにされていく命です。この命は、永遠に朽ちることのない命です。これが、わたしたちです。

それでは、この「内なる人」の本質は、何なのでありましょうか？　この「内なる人」は、どうのようにして、わたしたちの中にもたらされ、この「内なる人」は、どのようにして、わたしたちの中に働いているのでありましょうか。

この「内なる人」の本質は、わたしではなくキリストです。わたしたちではなくキリストの命です。わたしたちの考え、わたしたちの心の持ちよう、わたしたちの気分、わたしたちの状態、そういうものが「内なる人」を成しているの

ではありません。主イエスキリストご自身が「内なる人」の命となって、わたしたちを生かしてくださるのです。エフェソの信徒への手紙第3章17節をお読みいたします。

「信仰によって、あなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように」

わたしたちがキリストを信じるとき、主イエスキリストご自身が、わたしたちの内にお入りくださって、わたしたちの中で、わたしたちを生かす命となってくださいます。これが、わたしたちの「内なる人」の本質であります。このことについてパウロは、ガラテヤの信徒への手紙第2章20節で、このように述べています。お読みいたします。

「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」

もはやわれ生くるにあらず、復活の主イエスキリスト、われを生きたもうなり。

わたしたちの「外なる人」は、衰えて参ります。いままで出来ていたことが、病気のため、年をとったために、出来なくなる。見えていたものが、見えなくなる。聞こえていたのが、聞こえなくなる。考えられたことが、考えられなくなる。祈ることができたのに、祈れなくなる。このようにして、わたしたちはみな、十字架につけられることになります。これが自分だ、これで大丈夫だ、これで安心だ。そう思っていたものが、十字架によって、ひとつ、ひとつ、剥ぎ取られて行くことになるのです。それは、とても、つらいことです。とても、不安にさせることです。

しかし、十字架を通らされることによって、わたしたちの「内なる人」の命が、輝き出て来るようになるのです。復活の主イエスキリストが、わたしのうちに生きていたもう。もはやわれ生くるにあらず、復活の主イエスキリスト、われを生きたもうなり。イエスキリストの命が、わたしたちの「内なる人」となって、現れ出て来ることになる。このことについて、パウロはコリントの信徒へ

の手紙二第 12 章 9 節から 10 節で、このように述べています。お読みいたします。

「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです」

これが、わたしたちの姿です。わたしたちは、こういう者です。ここに、わたしたちの本当のアイデンティティーがあります。神は、わたしたちを御覧になって、こうおっしゃるのです。「おまえたちは、このような者である」

わたしたちは、信仰によって、自分たちを、神の「おこころ」に結び合わせたいと思います。そうして、祈りたいと思います。「どうぞ主よ。あなたのおこころを、わたしたちに行なってください。あなたが願っておられる者。そのような者に、わたしたちをならせてください」

そうして、わたしたちは、そのような、神が願っておられる姿の者になることができるのです。なぜなら、わたしたちの内に生きたもう、復活の主イエスキリストが、その大いなる御力をもって、わたしたちを変えてくださるからです。

最後にエフェソの信徒への手紙第 3 章 18 節から 21 節を、祈りとして、お読みいたします。

「どうか、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊さのすべてにあずかり、それによって満たされるように。わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのできるお方に、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン」